

長良川上流域の石製土掘り具 ～三島真二氏採集資料より～

長屋 幸二

Introduction to Stone Plows and Some Materials Collected at Upper Area of
Nagara River Shirotori-town Gujo-city

～From the Collection of Mishima Shinji～

Koji NAGAYA

はじめに

当館が収蔵する考古資料は、地表面採集品などが主であり、その多くは未報告である。こうした館蔵資料を研究活動の俎上に載せるため、順次観察、図化し、資料紹介を行っている。今回は、長良川上流域において採集された石製土掘り具と、その製作に関連する可能性がある剥片類について紹介する。

1. 資料採集地について

今回紹介するのは、郡上市白鳥町二日町の三島真二氏によって採集された資料である。三島真二氏は、白鳥町二日町を中心に多くの遺跡のフィールド調査にあたり、その成果は『白鳥町史』などに反映されている。惜しむらく故人となられたが、採集地については、三島賢氏より「白鳥町二日町寺谷下の(旧)白鳥スキー場近辺で採集したこと」「圃場整備の際に出土した資料を採集したこと」などご教授いただいている。

(旧)白鳥スキー場近辺には、寺谷下遺跡(岐阜県遺跡番号 G15S00749)、小丸山遺跡(岐阜県遺跡番号 G15S06203)がある。いずれも長良川河岸から比高差 80～180m ほど上がった山中に開けた緩傾斜地に位置し、縄文時代の遺跡として登録されている(岐阜県教育委員会, 1990)。寺谷下遺跡は標高 580m ほどの山林にあり、縄文時代中期の土器片、石鏃、石製土掘り具などが三島真二氏や北濃中学校郷土クラブによって採集されている(白鳥町教育委員会, 1976)。小丸山遺跡は標高 480m ほどの畑地で、三島真二氏によって採集された縄文時代草創期の尖頭器、縄文時代晩期の土器片が白鳥町史に報告されている(白鳥町教育委員会, 1976)。

また、(旧)白鳥スキー場直下の河岸段丘面には下田平遺跡、下田遺跡(岐阜県遺跡番号 G15S00750)があり、付近では昭和 50 年代に圃場整備が行われ、遺跡の一部が失われたとある(岐阜県教育委員会, 1990)。標高はお

よそ 390m である。下田平遺跡では数多くの石製土掘り具が、下田遺跡では石製土掘り具、磨製石斧、弥生土器片などが三島真二氏によって採集されている(白鳥町教育委員会, 1976)。

当館に寄贈いただいた資料は、多数の石製土掘り具を中心に、石冠、石匙、石錘、30 点ほどの土器片がある。土器片は小片が多く時期が特定できるものは少ないが、縄文時代後期前半の宮田式土器、縁帯文土器、晩期から弥生時代の条痕文土器が認められる。

複数遺跡の資料が混在することも考えられるが、土器片の年代、石製土掘り具が主となる組成、石製土掘り具

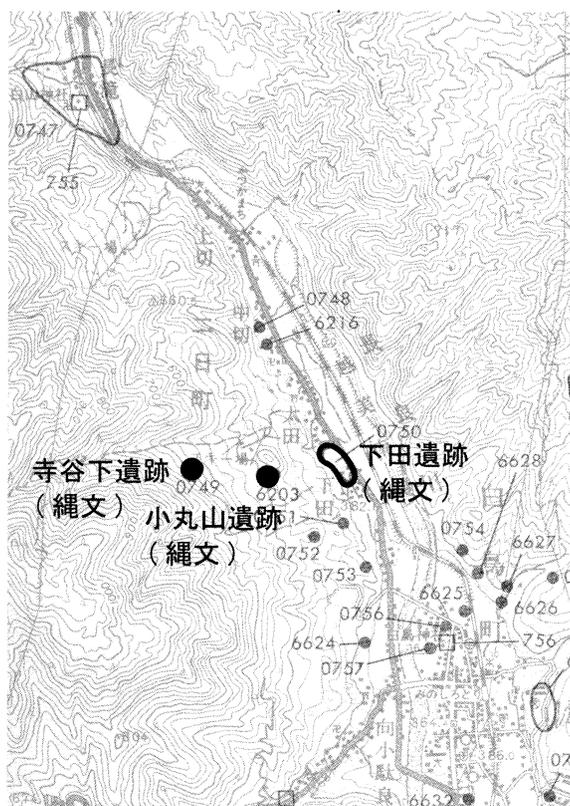


図1 三島真二氏による資料採集遺跡

岐阜県遺跡地図「岐阜 15」(岐阜県教育委員会, 1990)に加筆

刃部の摩滅状況から、河岸段丘面の下田平、下田遺跡の資料が主ではないかと考えられる。

2. 資料分析の課題

今回分析対象としたのは85点の石製土掘り具と66点の剥片類である。この剥片類にはチャート岩や下呂石などの剥片石器の素材となる石材は含まれず、安山岩、流紋岩といった当資料群の石製土掘り具の素材となっている石材である。図2のグラフに示したように、その石材はどちらも安山岩が3分の2程度、流紋岩が4分の1程度であり、石材比率はほぼ重なる。

85点の石製土掘り具のうち、40点が完形で残り45点は折損品である。完形の石製土掘り具の質量分布を見ると、質量100gから500gの間にピークを持つことなく分布している。一方、剥片類は50g未満をピークに質量が増す毎に点数が減り、150g以上では散在する傾向が示される²⁾。

石製土掘り具の素材にはなり得ない100g未満の小さな剥片は、背面も複数方向からの剥離面に覆われることから、多くは石製土掘り具を加工した際の調整剥片ととらえて良からう。

100g以上の大形剥片は石製土掘り具の素材となりうるサイズであるが、石製土掘り具の素材であるならば、遺跡内に大形の剥片を持ち込んで、遺跡内で石製土掘り具の製作が行われたことになる。

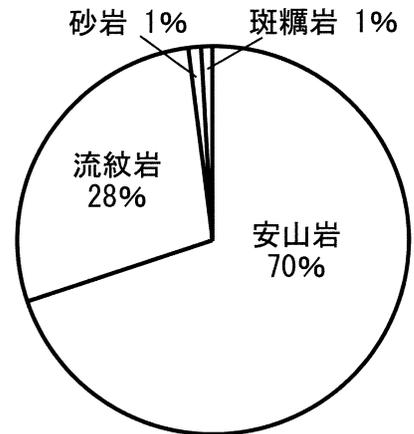
長良川上流域に所在すること。縄文時代後期を中心とすること。土器は少なく、石器組成は石製土掘り具に偏ること。当資料群のこうした特徴は、郡上市八幡町の勝更白山神社周辺遺跡と共通している。しかし、勝更白山神社周辺遺跡では、石製土掘り具製作に関わるような剥片類は見られない(長屋1995)。他の多くの縄文時代遺跡でも同様で、石製土掘り具の製作を遺跡内で行った痕跡が確認されることはきわめて稀である。したがって、石製土掘り具の製作は、集落を離れた石材獲得の容易な場所で集中的に行われたものであろうと考えられる(長屋2005)。当資料群の剥片類は、当地域の縄文社会を考える上で重要な意味を持つ可能性もある。

3. 資料の観察

10点の資料について図化した。1・2は完形の石製土掘り具。3は石製土掘り具の折損品。4～6は大形剥片類。7～10は小形剥片類である。

1は濃飛流紋岩製。円礫礫面の平坦面を広く取り込んだ幅広の剥片を横位に用いている。刃部にかけて厚みは徐々に減じ、わずかに取り込んだ曲面を基部にしている。

石製土掘り具の石材組成



剥片類の石材組成

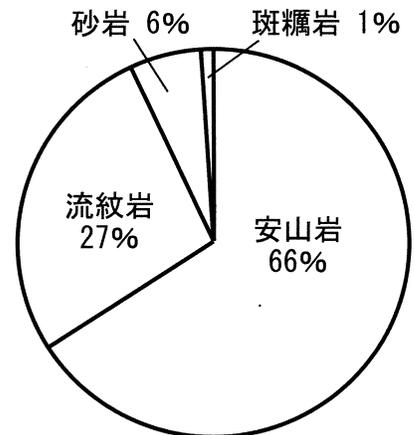


図2 石製土掘り具85点と剥片類66点の石材組成

表1 石製土掘り具(完形)40点、剥片類66点の質量分布

質量(g)	石製土掘り具 (完形)	剥片類
～49	0	30
50～99	1	17
100～149	5	11
150～199	4	2
200～249	3	3
250～299	5	1
300～349	2	1
350～399	3	0
400～449	5	0
450～499	2	0
500～549	4	1
550～599	0	
600～649	2	
650～699	1	
700～749	0	
750～799	0	
800～	3	
計	40	66

幅広の刃部は素材のエッジを利用し、若干の調整を加えるのみであるが、摩滅も観察できる。胴部から基部にかけて深く抉り込むように加工し、側縁の一部に潰れがみられる。長さ 161mm、最大幅 103mm(刃部)、最大厚 36mm(胴部)、質量 535g。

2は安山岩製。円礫の平坦面を広く取り込んだ幅広の剥片を横位に用いている。打点近くの厚い部位を刃部、徐々に薄くなる末端部を基部とする。刃部は表裏に施した剥離によって成形され、肩部には摩滅が観察できる。胴部は両側縁に散漫に潰れが見られ、腹面側の調整剥離はステップが発達している。基部は尖り気味の形状となるが、これは厚みとともに幅も徐々に減じる素材形状に合わせて調整を施したためである。長さ 137mm、最大幅 59mm(胴部やや刃部側)、最大厚 26mm(胴部やや刃部側)、質量 246g。

3はかなり厚手であるが折損品。凝灰岩質の軟質な安山岩。図右面の上部に見える剥離面はポジティブ面であり、この剥離方向から素材を横位に用いていることがわかる。折れは側縁からの加撃によるものであり、制作時の折れであろうと思われる。表裏とも深い剥離面に覆われ、厚さを減ずる調整が盛んであったことをうかがわせる。例えば、図右面の下部に見える右からの剥離はステップとなるものの有効に厚さを減じている。この剥離面には複数のバルブが観察され、複数回の加撃の末の剥離であることが読み取れる。折れの原因となった加撃も、同様の目的で施されたものかもしれない。長さ 86mm(現存長)、最大幅 81mm(刃部)、最大厚 44mm(胴部刃部側)、質量 326g。

4は硬質の安山岩製。亜円礫の曲面に設けた2枚の剥離面を打面とする。亜円礫の稜、縦位に走る先行剥離と礫面のなす稜を対角線に取り込むように、打点を頂点の一つとする方形の剥片を作出している。裏面左上部の剥離は深く大きく、形状を変える調整であるが、部分的である。裏面左下縁の剥離はやや細かく、大きさ、間隔もそろい、刃縁も直線的であり、スクレイパーエッジのようである。調整剥離は主に腹面側に施されている。長さ 117mm、最大幅 104mm、最大厚 26mm、質量 280g。

5は礫面にアバタ状のポーラスが発達する軟質な安山岩製。円礫の曲面付近を加撃し、平坦面を取り込むように横長の剥片を剥離している。打面部には表裏に小剥離が連なり、主要剥離面のバルブは平坦である。楔のような垂直方向の加撃が想定される。端部はステップもしくはヒンジ気味となる。一部、ヒンジを除去するかのようには表裏に剥離が施される。左右の長さ 116mm、上下の長さ 84mm、最大厚 21mm、質量 212g。

6は硬質の安山岩。円礫の曲面付近を加撃し、平坦面を取り込むようにやや縦長の剥片を剥離している。打面は線状で、主要剥離面のバルブは平坦。5と同様、楔のような垂直方向の加撃が想定される。打点側が薄く端部側が厚く、末端は緩やかにヒンジ気味となる。左側縁は背面からの加圧により折れている。長さ 105mm、最大幅 86mm(現存部位)、最大厚 22mm、質量 232g。

7は凝灰岩質の軟質な安山岩。線状打面で、主要剥離面はバルブ発達せずやや内彎気味である。背面に見られる上下からの剥離面は石製土掘り具両側縁からの先行する調整剥離痕であろう。下からの剥離の打点はやや遠く幅広の石製土掘り具であったことがうかがわれるが、当剥離によって広い範囲に厚さを減ずることに成功している。左縁はスポール状の剥離が下から入り、両極打撃による剥離であると思われる。長さ 60mm、幅 55mm、厚さ 14mm、質量 54g。

8は結晶の発達したやや軟質な安山岩。やや厚手で横長の剥片。背面には円礫面が見られる。背面には上からと左からの剥離痕があり、いずれかが側縁、いずれかが刃部の調整であろう。刃部近くの調整剥片であることが分かるが、摩滅は観察できない。主要剥離面末端は8mm厚のステップが発達する。長さ 50mm、幅 59mm、厚さ 16mm、質量 50g。

9は軟質の安山岩。背面には上からと右からの剥離痕があり、8と同様刃部近くの調整剥片であることが分かるが、摩滅は観察できない。上からの剥離は密で、ステップも発達して潰れ状となっている。当剥離によってそれらを除去し、深く厚さを減ずる事に成功している。3などのように、凝灰岩質の石製土掘り具の中には厚手のものが存在し、厚さを減ずることに苦慮しているようである。7や9は、そうした状況下で作出された剥片のようである。左部の面はポジティブ面であり、石製土掘り具素材の主要剥離面側の調整剥片であることが分かる。当資料群の主要剥離面が観察できる石製土掘り具は、1～3をはじめ全て剥片を横位に用いており、それに倣うなら右側が刃部であったと想定できる。長さ 58mm、幅 41mm、厚さ 12mm、質量 30g。

10は軟質の安山岩。剥離面打面が残るが打点は近く交互剥離によることが読み取れる。ただし、石製土掘り具の調整にしては打角が急で、これもまた厚手の石製土掘り具に施された調整剥離のようである。背面には上、右、下からの剥離面が見られる。下からの剥離は対辺からの調整。右からの剥離は刃部からの剥離であろう。上、下からの剥離は打点が近くにうかがえることから、幅の狭い石製土掘り具の刃部近くに施された調整であることが

読み取れる。長さ 35mm、幅 50mm、厚さ 11mm、質量 17g。

4. 考察

前項で示したように、剥片類をどう評価し、石製土掘り具製作の様相をどう読み解くかが当資料群の課題である。

今回図化した小形の剥片は、いずれも石製土掘り具の調整剥片と見られる。摩滅の生じやすい軟質の石材であるにもかかわらず、刃部に近い部位の剥片にも摩滅は観察できず、使用の際の刃こぼれや、刃部再生のリダクション剥片ではないようである。確かに、遺跡内で調整剥離が行われたことを物語る貴重な資料群であると評価できる。ただし、小形剥片の多くは厚みを減ずるための調整剥離によるものである。剥片から石製土掘り具を作成する全ての工程が当資料群の中に読み取れるのではなく、厚手の製品の厚さを減ずるといった一部の工程のみが行われたのだといえよう。

大形の剥片が遺跡内で作出されたのではないことは、石核と思われる資料が見られないことから想定できる。剥片の多くに礫面が残ることから、一つの原石から1枚ないし数枚の剥離が行われたのみであることがうかがわれる。大きな原石を持ち込んで数枚の剥離をするのみで廃棄することは合理的でなく、これらの剥片は遺跡外から持ち込まれたと見て良いであろう。

問題は、これらの大形剥片がどのような目的で持ち込まれたかである。石材比率の重複からは石製土掘り具の素材であることが想定されるが、これらの剥片類は最終的に石製土掘り具として加工されなかったものである。

- ①石製土掘り具製作以外の目的で搬入された剥片。
- ②石製土掘り具製作を目的としたが、何らかの要因で途中で断念した剥片。
- ③石製土掘り具製作を目的としたが、何らかの要因で途中で目的変更した剥片。

など様々な可能性が想定される。

当資料群の石製土掘り具は前述したように、素材を横位に用いるものがほとんどである。しかるに、4・6のように、大形剥片は縦長のものが多い。これらを横位に用いては、石製土掘り具を作成することはできない。したがって、持ち込まれた大形剥片は石製土掘り具製作を目的としたものとは考えがたく、「石製土掘り具製作以外の目的で搬入された剥片」と見ることができよう。例えば、4のような大形粗製スクレイパーなどを作成するためではないかと考えられる。

以上のように、剥片類の詳細な観察・分析から、当資

料群は、厚さを減ずる工程が認められる点の特異であるものの、石製土掘り具製作のあらかたは遺跡外で行われていることが確認できた。従来から想定されている石製土掘り具製作のシステムの枠内で評価できることが明らかとなった。

なお、今回紹介した資料の一部は、当館人文展示室1洞窟ジオラマ内で展示している。

本稿執筆にあたり、三島真二氏のご子息である賢氏には、採集地等についてご教授いただきました。感謝いたします。

註

- 1) 河岸段丘上では刃部が摩滅し、崖錐堆積地では刃部が潰れる傾向が、郡上市八幡町勝更白山神社周辺遺跡と西乙原遺跡の比較から指摘されている(長屋, 1995)。当資料の石製土掘り具は、摩滅が観察できる資料が若干あるものの潰れは観察できない。
- 2) この資料群は地表面採集品ではあるが、特定の器種などを選択的に採集しているものではなく、おおよその傾向は掴むことができよう。

引用・参考文献

- 岐阜県教育委員会(1990). 改訂版 岐阜県遺跡地図。
 白鳥町教育委員会(1976). 白鳥町史通史編上巻, 白鳥町。
 長屋幸二(1995). 西乙原遺跡、勝更白山神社周辺遺跡、
 (財)岐阜県文化財保護センター発掘調査報告書(22)。
 長屋幸二(2005). 石製土掘り具の製作者, 岐阜県博物館調査研究報告(26), pp.5-6.

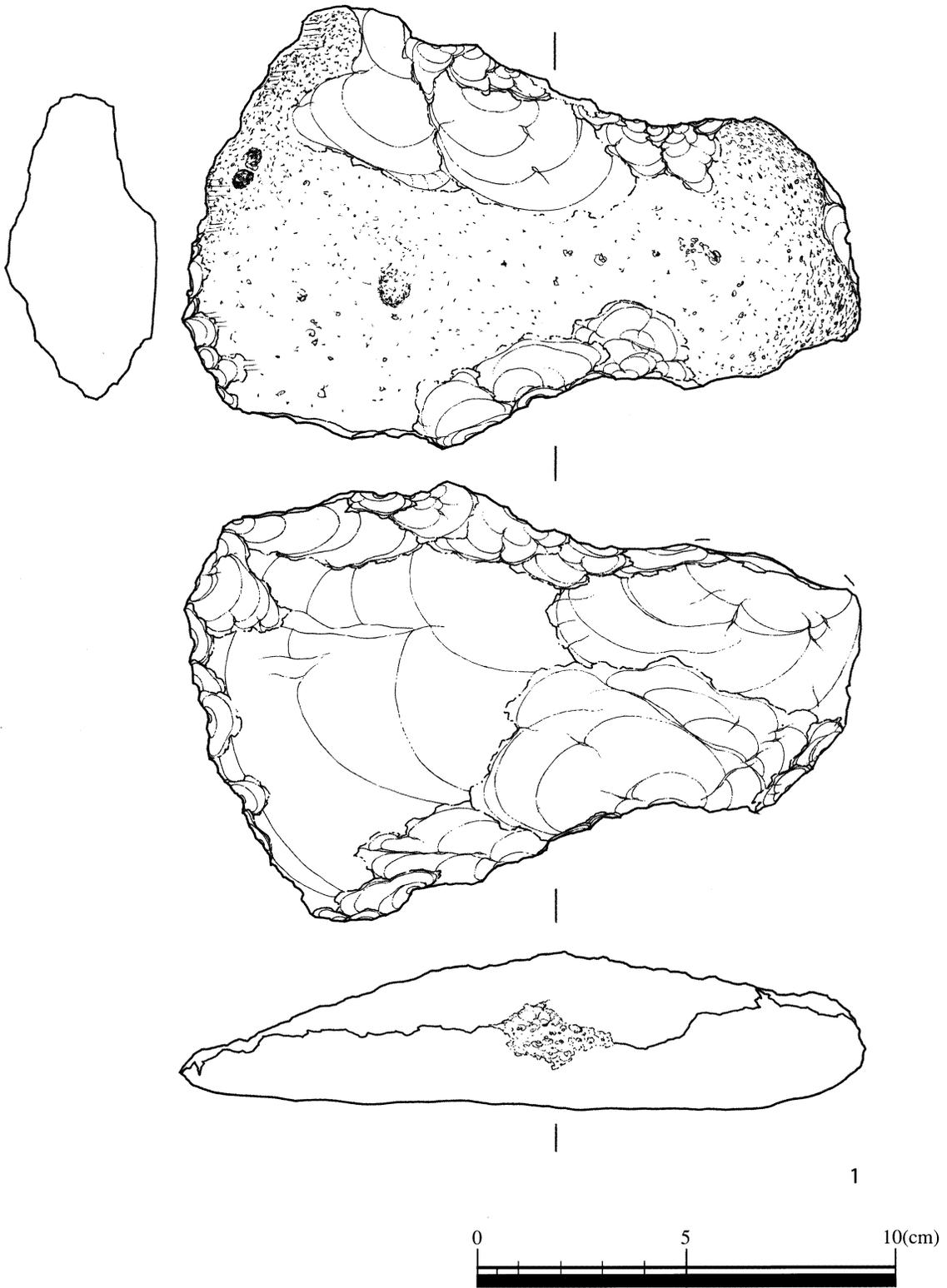


図3 三島真二氏採集石製土掘り具 (1)

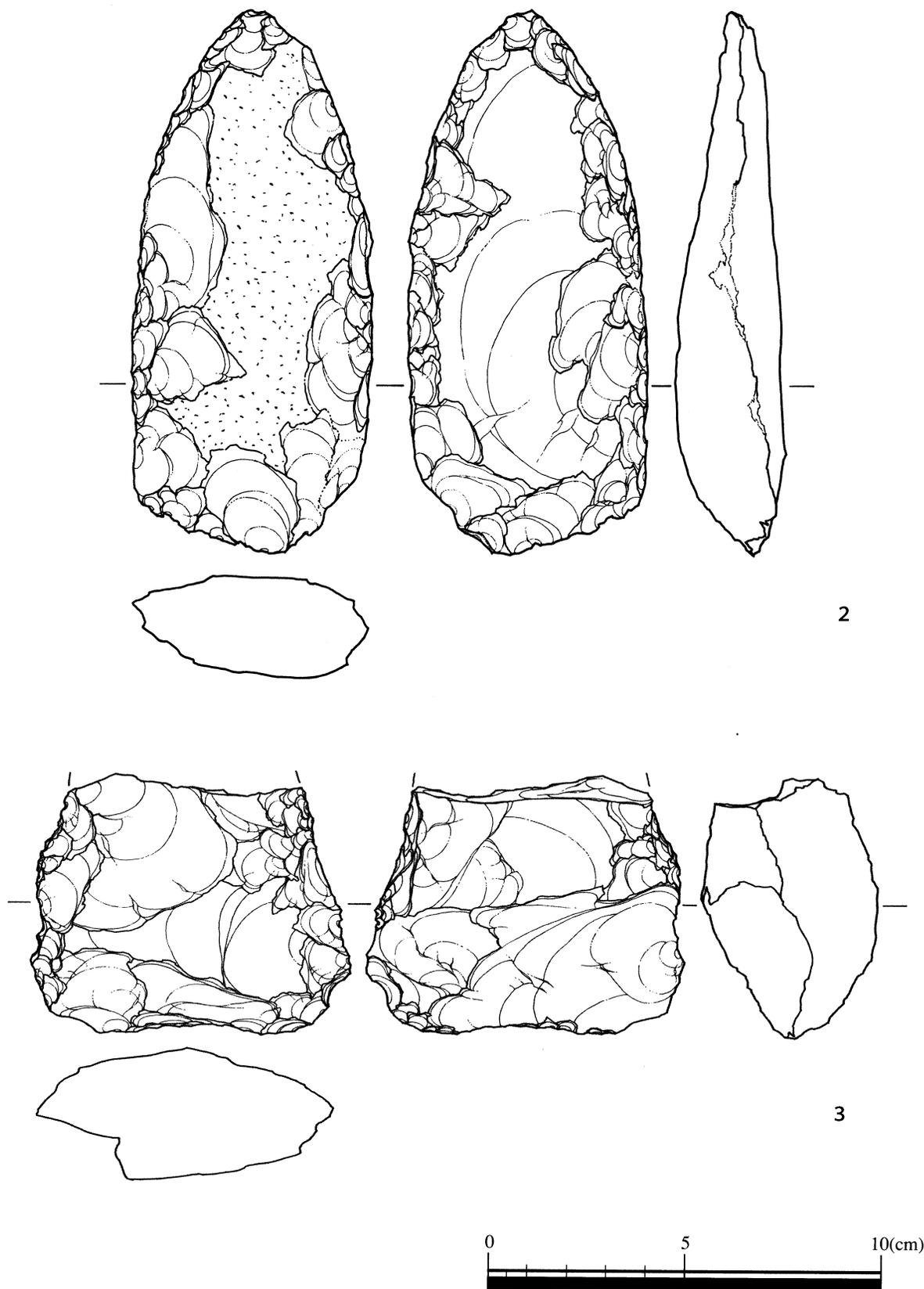


図4 三島真二氏採集石製土掘り具 (2・3)

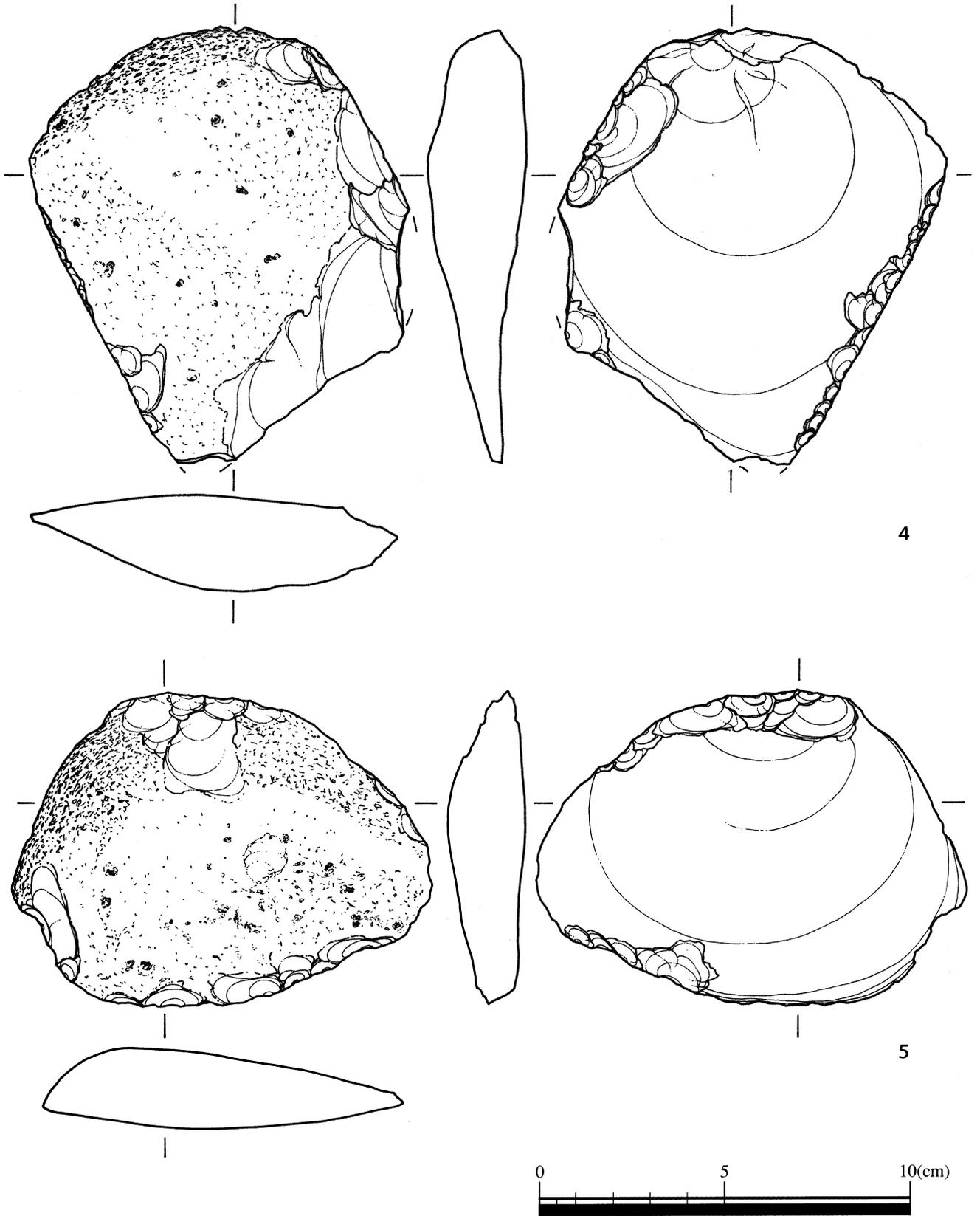


図5 三島真二氏採集大形剥片 (4・5)

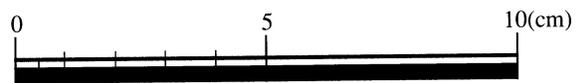
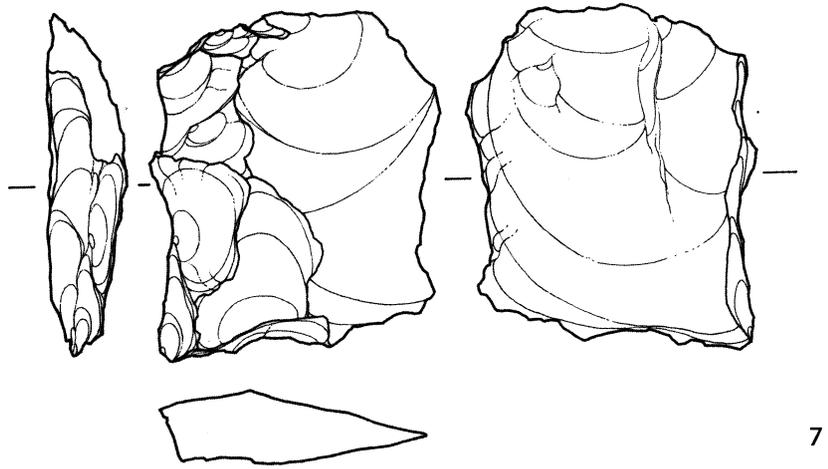


図6 三島真二氏採集大形剥片(6)、小形剥片(7)

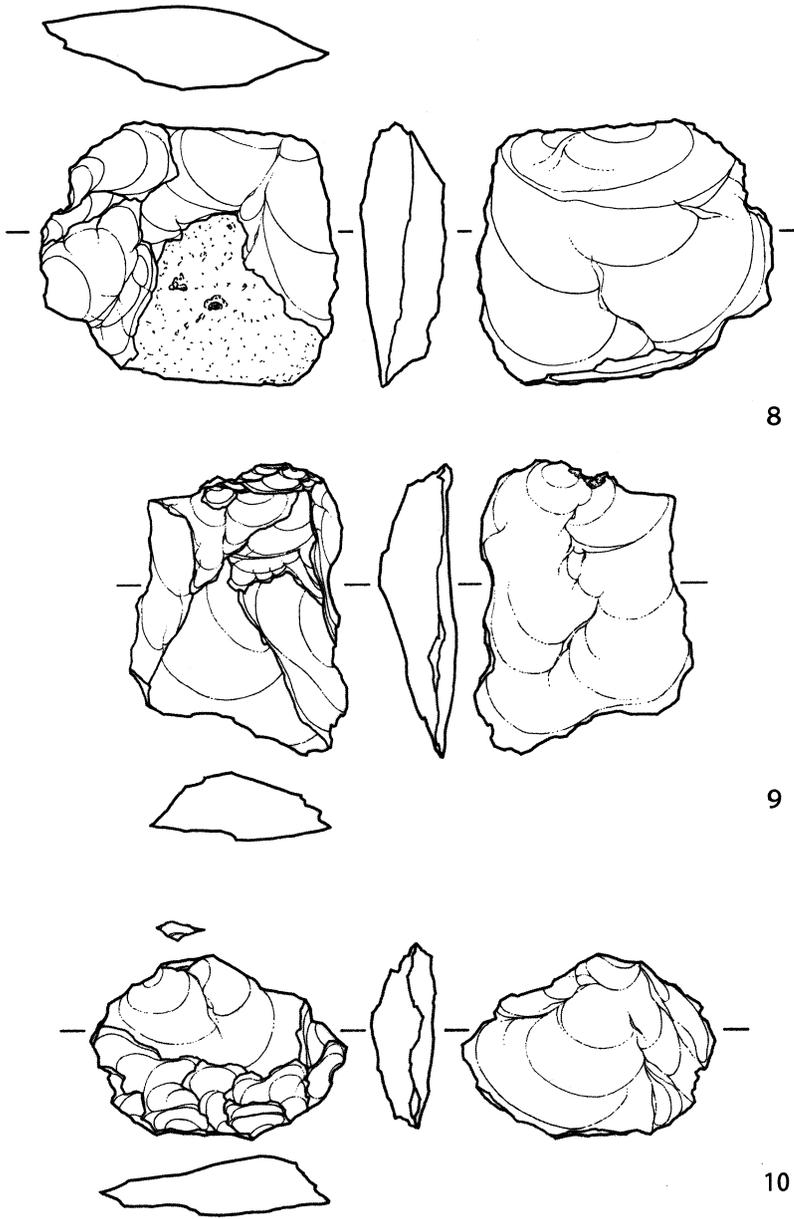


図7 三島真二氏採集小形剥片 (8・9・10)

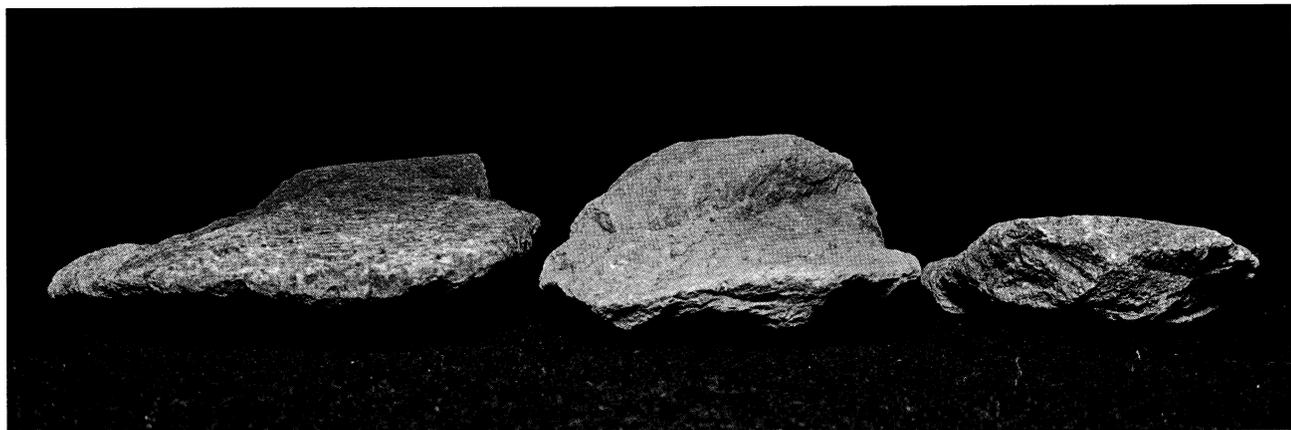


図 8 石製石掘り具刃部（左から 1・3・2）



図 9 大形剥片主要剥離面：パルプの状況（左から 6・5・4）

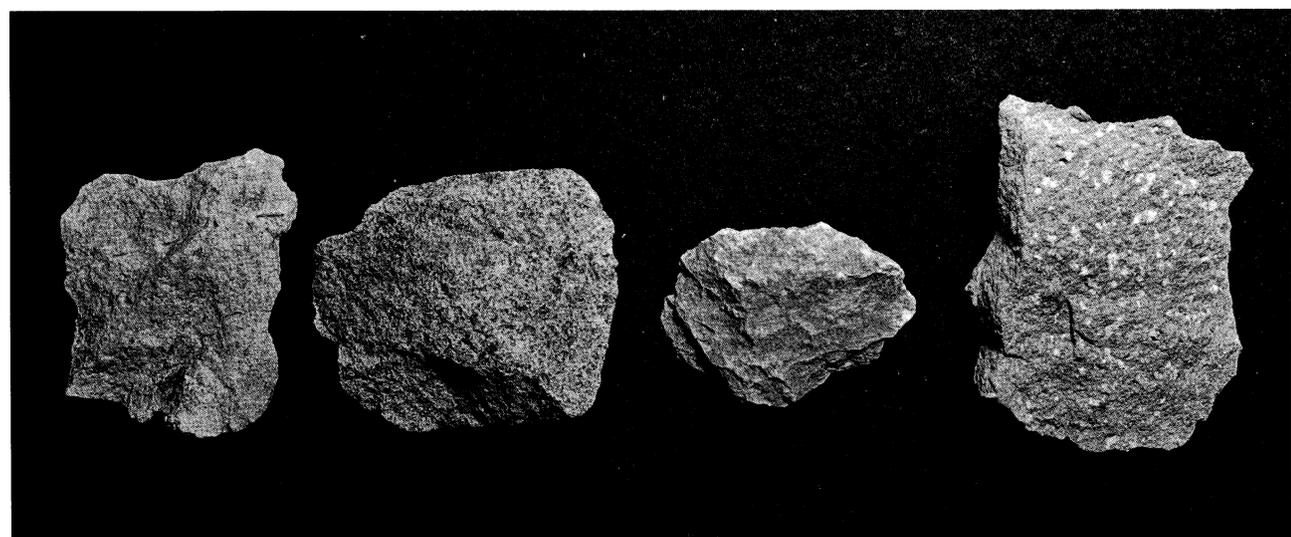


図 10 小形剥片主要剥離面：パルプの状況（左から 9・8・10・7）